

## 下野先生による木島の考えの要約と提示について

木島 史雄

### ○下野

ちょうどいい機会なので、すみません、ちょっと長くなってしまいうけれども、今日、このディスカッションのときに、木島先生がいらつしゃらないということで、ちょっと二人で事前にやりとりをしたのが、まさに、この問題に関してです。ついでに紹介しておきますが、木島先生は、ご提題のとおりで、東洋的な教養世界を考えておられて、それは必ずしも直接経験を必要としないような文化の形態がもともあつたのだと。そういうことを紹介されたと思います。

それでやりとりした際に、ただ、その文化形態を維持するためには、何かしら制度による支え、つまり教育です。これが必要になってくるのではないかと。その制度・教育の、ある程度、相当程度の部分は、やはり直接経験に支えられているはずなのであつて、そうだとすると、その直接経験が、例えば、疫病とか、災害とか、そういうことで短期間にせよ深刻に断絶を被つた場合に、おっしゃるような東洋的な教養、間接経験をベースにするような東洋的な教養というものを維持すること自体が、相当、困難になるのではないかということ、私は質問したわけです。

そうしたら、木島先生は、そういう側面はあると思うというふうにおっしゃっていました。ただ、それにしても、それについて、おそらくは脆弱な文化と比較的強靱な文化があつて、自分としては、東洋の伝統的な教養世界は、その意味では、強靱な文化のほうに入るのではないかということをおっしゃっていました。ですから、歴史的に見るとか、文化類型論的に見ることを考えると、そういういったような区分もあり得るかなと思つたりするわけです。

木島がもし議論に参加できていれば以下のように発言したかもしれません。

下野先生が集約くださったようにおおむね考えています。継承に関して脆弱な文化と強靱な文化があるということに関しては、まさにその通りだと考えています。また教育という制度がその伝承性に深くかかわるといふ点も考えは変わりません。

少し補足するならば、古典を読むという文化行為を考えた場合、もちろん口伝による師承関係（大学という制度も含めて）も重要ですが、書物だけでも可能な部分が、古典学についてはあるように思います。例えば、徂徠などは師承関係を抜きにして、かな

り突発的に古典が読めるようになっていきますし、近いところでいえば文化大革命で大学教育が10年近く破綻した中華人民共和国にあっても、かなり衰弱はしましたが読みの伝統は途絶えませんでした。さらに言えば、近世の日本では、直接的な教育を中国から受けずとも、漢学は日本なりに成立し、むしろ中国に先行するような形で「考証学」的學術態度が発生、発達しました。

このような成り行きには、「紙」という學術媒体の力が大きくかわっていると考えています。東洋の古典世界では、古代人の記した原文・本文だけでなく、それに対する注釈が豊富に蓄積されてきていて、口伝を得なくとも、かなり容易に文獻世界に入ることができます。文字が記された紙文獻があり、そこそこ漢文が読めれば、東洋古典文獻世界への参入は可能であつたろうと思います。その際に、先行文獻が豊富に供給されるということが必須条件であつて、近世以後の東洋世界では印刷と商業出版によって、ほぼその条件が整っていたということができるでしょう。もちろん需要があればその出版であるわけですが。

発表の中でも触れましたが、中国には「典故」という考え方があつて、ひとかどの文化人は、実質はどうであれ、わきまえておかななくてはならない基礎文獻が明確に定義されていきました。そしてそれを官吏登用試験の出題範囲とした「科挙」という試験制度まで存在していました。実際、古典時代中国では長らく「学校」というのは、実質的には身分保証の制度という側面が強く、科挙のための勉強は、家庭教師などに頼るとしても、ひたすら独学で行うものであつたのです。

時代で異なりますが、基礎教養書は、最重要のものは五経などとして選定されるとともに基盤注釈も選定、刊行されました。それより重要度が下がる書籍についても、各時代に書籍目録が著され、文獻書籍の総体が把握できるように仕組まれています。また典故を網羅した辞書や、項目ごとの先行記事をまとめた引用型百科事典(類書)なども整備されました。

逆にこのような教養試験至上主義は、民族や出自を無みする働きを持つており、阿倍仲麻呂を例に挙げるまでもなく、教養さえあれば、政府高官にまでのぼることが可能でありました。

このような文化基盤の裏返しとして「教外別伝」「不立文字」を謳う禅があるわけですが、こちらについては十分に語る力を持っていません。ただし現在の臨済宗の教えが、江戸時代の白隠という一人の僧の伝統を引くものだけになっていることからすれば、禅はある意味では脆弱な文化と言えなくもありません。それを自覚した故でしょうが、禅は「教外別伝」「不立文字」といいながら、膨大な量の法語・語録(先行する僧の言行録)を蓄積しています。そしてこの禅的な伝承制度を見習う形で、宋代頃から儒学における師承関係が重視されるようになってゆきます。